

日本国一井沢式新ニッポン風土記（2010年3月）

（井沢元彦、月刊旅行読売、2003年6月～2009年6月号）

本書は足かけ6年にわたり連載した、日本の「旧国」に焦点をあてた「平成版人国記」をまとめたものだ。

最後に日本国全体の、世界の国々と比較しての特徴を書いてみよう。

日本はいうまでもなく島国である。

大陸国家ではないから、面積は約38万平方キロであり、同じ島国であるイギリス（約24万平方キロ）よりはかなり大きいものの、アフリカ大陸の東側に位置するマダガスカル（共和国約59万平方キロ）よりはかなり小さい。ちなみに国面積の順位でいえばマダガスカルが45位、日本は60位、イギリスは77位となる。

しかし、同じ島国でもおそらく日本唯一ともいえる特徴は、気候と風土が極めて多種多様であることだ。

一方でスキーや本格的な冬山登山が楽しめ、その一方でスキューバダイビングなどのマリンスポーツが楽しめる。実はこんな国はそれほどはない。それどころか、国土が平地ばかりで山がない国とか、大半が砂漠であったり逆に深い密林であったり、山はあるが海はない（面していない）という国も珍しくない。

しかし、日本という国には、世界のあらゆる環境がそろっているといっ

も過言ではない。

北極の氷山はないがオホーツクの流氷を見ることができるし、灼熱の砂漠はないが鳥取には砂丘がある。広い砂浜なら至るところにある。そういう意味でいえば、日本は「地球のミニチュア」でもある。ここで育てば、世界のどこへ行っても、それほど驚かないだろう。

[外国でお茶が盛んになった理由]

逆に驚くこと、世界の常識ではないことはあるだろうか？

私はそれは「水」だと思う。

明治以降の近代化、工業化の流れの中で、何事も「水に流せばよい」とばかりに天然の川を汚し続けた結果、昔のように「どの川でも水を汲んで飲む」という、おそらく世界中どこの国にもない美点は失われてしまった。

しかし、それでも日本は世界有数の水の綺麗なおいしい国である。

たとえば、世界の国々には、それを代表する川がある。中国でいうなら黄河や揚子江、東南アジアならメコンやメナム、インドならガンジス、ヨーロッパならライン、セーヌ、テムズといったところか。

しかし、これらの川はたとえ何百年さかのぼろうと、決して手ですくって飲むわけにはいかない。そんなことをしたら、いっぺんに腹をくだして病気になるだろう。

「お茶」というものは中国人の発明である。しかい、中国人がなぜお茶を

発明する必要があったのか、多くの日本人は気づいていない。それは「水はマズイ」いや「そのまま飲むのは危険」だからである。

そこでまず煮沸する。しかし、煮沸は有効な消毒手段ではあるが、水をおいしくするわけではない。そこで、植物の葉を刻んだものを入れてマズイ水をいかにうまくして飲めるか、というのが茶の必要とされた理由だったのだ。だから、とびきり水のマズイ国にすんでいるイギリス人は、古くから東洋の茶を求めアヘン戦争まで起こした。植民地時代のインドに大々的に紅茶を作らせたのもそのためだ。

そのイギリスの植民地からアメリカが独立したのは、高い茶を売りつけられたことがきっかけとなった。アメリカ人なら誰でも知っている「ボストン茶会事件」である。

しかし、アメリカだって水はうまくない。そこで、植物の葉の代わりに植物の実（豆）を挽いて粉状にしたものを湯にいれて飲んだ。コーヒーである。イギリス人のライバルのフランス人もコーヒーを飲んでいる。

今でこそ、そのフランス産の「エビアン」やアメリカ産のミネラルウォーターがブームだが、そんなものは地面を深く掘削する技術が実用化される近代までは、まったく不可能だった。限られた人間が、井戸水や岩清水を飲んでいただけなのだ。

[日本の「水」のもう一つの魅力]

ところが、日本では、どこへ行っても岩清水がある。日本の川というのは、岩清水が川になったと思えばいい。

これは日本列島が東西に長く、しかもその中央に背骨のような高山群があるという、独特の地形の賜物である。中国大陸からくる寒気が、この「壁」にぶつかり雪となって日本海側に降る。日本海側にとっては大迷惑ではあるが、その結果、天然のメカニズムで蒸留された水が保水力のある山々に蓄積される。それが春と共に少しずつ解けて、日本の国土をうるおすのである。

こういうのを、地中から出る硬水に対し軟水というが、おそらくは日本は世界一軟水の豊富な国である。そして、これだけなら、まだ世界には「ウチの国だって水は豊富だ」と反論できる国があるかもしれない。

しかし、実はもう一つ、日本の水は素晴らしいのだ。それは世界一といってもいい温泉王国だからだ。環境省の統計では、この狭い島国の中に3000以上もある。この他に、山の湧き水的な露天風呂一つの温泉まで加えたら、一体いくつになるのか見当もつかないほどである。

[温泉、山、海・・・自然に恵まれた国]

温泉というのは、いうまでもなく火山活動の副産物だ。ということは、火山が多く火山帯がある国でなければ、いい温泉は出ないのである。

中国大陸はあれだけ広いが、いい温泉は少ない。朝鮮半島もそうだ。だか

らこれらの国からの観光客の目当ての一つは温泉である。

世界にも温泉が豊富な国はある。だが、そういう国は大概飲料水はマズイ。温泉の中にも飲用に適するものもあるが、ほとんどは「飲めば毒」になるものばかりだ。

お気づきかも知れないが温泉はすべて硬水である。軟水が豊富な国は硬水（温泉）には恵まれない、というのが世界の常識である。

だいたい水道水がそのまま飲用に適する国の方が、はるかに少ないのだ。それを考えれば、いかに日本が水に恵まれた国であるかがわかるだろう。清流がある。その清流でしか生きられないアユ、ヤマメ、イワナという、外国ではあまり見かけない魚が、多数生殖している。

一方で火山がときどき爆発するため、優美な形の山があちこちに出現する。旧国名をとった「近江富士」とか「讃岐富士」とか呼ばれる山もある。そうした山々の中核に存在するのが富士山であり、しかもこの山は日本一の高さを誇る。

日本という国が景観に恵まれているのも、山々を巡る清流の侵食作用と、火山の爆発による造山作用があるからだ。今造山といったが、川をせきとめることもある。上古の昔、富士山の爆発によって川が分断されて生まれたのが富士五湖である。こうしたことが、国土の多様化を演出している。また海に面する地域も、大洋に接する断崖があるかと思えば、瀬戸内海の

ような多島海における、あるいは三陸のようなリアス式海岸の巧みな自然の造形が見られる。

[「和を以って貴し」とする日本人]

そして、この風光明媚な山紫水明の国の最大の美点は、何事にも和を重んずる日本人だと思う。

この国の人々は昔から争いを好まなかった。確かに侵略もあったし内戦もあったが、ヨーロッパやイスラム社会の苛烈なものに比べれば、この国の人々はお互いの個性を尊重しつつ、平和に暮らしていた。

もちろん、欠点もある。

その一つは、島国根性とヤユされるように、ひとりよがりの独善性があることだろう。また、「よそ者」を迎え入れない排他性もある。

ある外国人の評論家は「日本人は世界で最も完璧な差別をする人々である。

しかし、その差別があまりに完璧なので問題が生じない」といったという。

おそらく、読者の大半は「えっ、日本人は差別などしないよ」と心外そう

にいうだろうが、この評論家のいうことは私には理解できる。

要するに日本人は、白人であろうとキリスト教徒であろうと、「ガイジン

さん」としては平等に扱う。だから、一見差別がないように見えるが、一

歩踏み込んで日本人になろうとすると極めて大変だ、ということだ。

私の友人（白人）は相当日本語が上手いのだが、いくら日本語で話しかけ

でも日本人は英語で返してくるので困ったという経験をもっている。もちろん、それは日本人の親切心の表れでもあるのだが、広い意味の「差別」であるということも事実であろう。

そして、日本人には部落差別という、克服すべき「病」もあるのだが、それについてはまた別の機会に譲ることにする。

とにかく、多くの日本人自身が自覚しておらず、外国にいて初めて痛感することだが、日本ほど豊かで恵まれた国はないかもしれないのだ。石油が産出しないとはいうが、産油国の多くは飲料水に乏しい。資源大国は、決して恵まれた国とはいえない。

やはり本当に恵まれた国というのは、住民にとって住みやすい気候・風土をもった国のことではないだろうか。

(井沢式新ニッポン風土記、2010年3月、旅行読売出版社)